みどりの地球をみどりのままで…

グリーンコープ

共生の時代

号外

●発　行　グリーンコープ共同体理事会
●編　集　共生の時代・編集部
〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階
●電話（092）481-7923　●FAX（092）481-7876
●ホームページ：http://www.greencoop.or.jp/

産直野菜の生育に被害続出!!

長雨、豪雨、日照不足…、グリーンコープの産直生産者が悲鳴をあげています！

豊肥アグリ企画（大分県）

▲被害がひどいキャベツ畑と生産者の十時（とときさん。栽培したキャベツは1割しか出荷できない。豊肥アグリ企画は、大分と熊本の県境にあり、高原の冷涼な気候を利用して、レタスやキャベツ、小松菜、ほうれん草などを露地栽培している。チンゲンサイは雨で流され、その後植え直した。レタスは根痛みや下葉の腐れがひどく、残った中から選んで出荷している。通常の5割程度しか収穫ができない。キャベツを作っている生産者の高村さんの畑では、天候不順でヨトウムシが大発生、根っこから食べ尽くされた。

※1haは100m×100m＝10000㎡。ドーム球場の広さは観客席を含めて5haだとすると、各生産地の畑の広さがイメージできる。

今年は梅雨入りが遅く、稲作への影響が心配されていました。しかし、梅雨に入るやいなや、その雨の降り方は尋常ではなく、集中豪雨は各地に甚大な被害をもたらしました。その後梅雨明けは長引き、九州では８月４日、東北地方の梅雨は明けないという、過去の記録を更新する結果になりました。気象庁は６月に発生したエルニーニョとの関連を指摘しています。

このような異常気象ともいえる状況に悲鳴を上げているのが、農業関係者です。グリーンコープの青果生産者も例外ではなく、多くの産地に被害が出ています。

グリーンコープの産直野菜産地は九州各県、中国地方、長野、北海道にあります。それらの産地のほぼすべてが影響を受けており、ひどいところは、田畑が冠水し作物が根腐れを起こしたり苗が流されたり、病害虫にやられたりと、多大な被害が出ています。また、梅雨明け後の日照りによる極端な高温傾向がさらに追い討ちをかけています。そのような状況の中、生産者は安心・安全な野菜を組合員に届けるために、被害にあった畑を整地して、再定植や秋冬野菜の植付の準備をしています。

産地における自然災害は、注文したものが「欠配」「規格（量目）変更」「品質の低下」など、さまざま形で組合員の台所を直撃します。私たちグリーンコープは、生産者と共に産直を築く立場として、産地の被害状況を共有し、「生産者の顔が見える」関係を深めていきたいと考えます。

なお、グリーンコープでは、異常気象や天災に伴う作柄不良などの作物被害のあった場合の補填制度として、「青果物災害補填金制度」を生産者と共に運用しています。生産者はグリーンコープとの取り引き高の１％相当額を積み立てています。今回のような場合は、補填すべき金額の半分を生産者の積立金から、半分をグリーンコープから助成して補填することになります。

今回の天候不順によるグリーンコープの各産地のようすを調査しました。被害のひどかった産地については、そのようすを取材し生産者の声を聞きました。

南高有機農法研究会（南有研）（長崎県）

▲土の中で溶けているバレイショと水分を含んで芽を出してしまったバレイショ。そして生産者・荒木さん

広大なバレイショ畑には雑草だけが目立っていた。

南有研はバレイショの産地。今年は干拓地の畑の被害が大きい。雨が上がって３日くらいしないと、機械が入れられない。そのため収穫時期が延びてしまい、土の中でバレイショが溶けてしまっていた。6haのうち、4ha（収量予定150t・約2,000万円）がダメになった。今回の天候不順も自然災害だと思って受け止めているが、中々厳しい。

生産者と組合員と支えあい助け合って、厳しい状況を越えていきましょう

こんな時だからこそ グリーンコープは生産者と共に 本当の産直を守っていきます

グリーンコープの青果物は「欠配」「規格（量目）変更」になる場合があります。申し訳ありません。

グリーンコープの産直とは、「生産者と消費者が顔の見える関係で、お互いの信頼の上に立ち、生産者にとっては農業が安定して続けられ、組合員にとっては安心して生産物を購入でき、共に農業を守る立場」で提携しています。したがって、継続生産できるよう、毎年協議した固定価格で取引をしています。通常、青果物の場合は年間の注文予想量を生産者に提示し、作付けをしてもらっています。生産者は注文の上下にも対応できるように、1.2倍～1.5倍の作付けをしています。しかし、異常気象や天災の影響による作柄不良等が発生した場合や市場価格の高騰等の影響で注文数が収穫量を大きく上回る場合は、お届けできる量が極端に少なくなったり、お届けできなくなる事があります。グリーンコープが求める「安心」「安全」な「食べもの」は、生産者の皆さんとの「助け合い」と「信頼関係」によって成立します。

厳しい天候災害の中、生産者も回復に一生懸命に頑張っています。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、引き続き、グリーンコープ商品のご利用をよろしくお願い致します。

グリーンコープの産直産地の主な被害状況

北海道	訓子府有機農法研究会（玉ねぎ他）	日照不足と記録的な降雨･低温による生育遅れ･病気の発生が多く見られる。早生種は肥大不足や病気の発生もあり、収量減の圃場がある。急激な晴天･高温で根傷みが発生。収量減が懸念される
	すずらん会（メークイン･男爵･人参、かぼちゃ･長芋）	長雨により病害虫の被害。畑が冠水、トラクターが畑に入れず防除など作業ができなかった。生育遅れで小玉傾向、減収･品質低下が懸念される
	美瑛町農協（小麦）	秋まき小麦には穂発芽が発生していて、収量減･品質低下となっている。パン用の春まき小麦は穂発芽なしで順調に生育している。
長野県	JAながの（トマト他）	生育の遅れ、肥大不足。水田転作圃場が冠水し表土の流出被害。出荷遅れ
岡山県	岡山ピーチボーイズ（白桃）	糖度の低下、水ぶくれによる打ち身あたりなど品質の低下。病害虫も増え収穫量も低下
島根県	いわみ野菜クラブ（ほうれん草･水菜他）	ハウス内に水が入り込む。同時に過湿により作物の根傷み、日照不足による病害虫が発生
	島根えーやさい研究会（ほうれん草･オクラ）	ほうれん草のハウス5棟に浸水。7月上旬の出荷ができなかった。日照不足による土作りや秋冬の播種が遅れ
福岡県	たのくら会（ミニトマト･トマト他）	ハウス内に水が入りミニトマト･トマトが割れてしまい出荷ができなくなった
	小石原梨部会（20世紀梨）	根傷み、玉太りに影響
	小石原産直がんばろ会（ほうれん草･チンゲンサイ他）	ハウスへの冠水。生育遅れ、病害虫の発生で収量減少
熊本県	産直なごみ（なす･にがうり）	病気の発生が多く見られる。メンバー3人のうち1人が減収気味で2人でカバーしている
	風鈴会（大根･トマト･キャベツ他）	露地栽培の畑への植付が減少。しかも傷みが多い。ハウス物は花芽がとんで、実がつかない
	御岳会（チンゲンサイ･小松菜･レタス他）	軟弱野菜については下葉の流れがみられる。虫の発生も予想される。出荷不足が懸念
	佐伊津有機農法研究会（ぶどう他）	「紅伊豆」に「果実の割れ･着色の遅れ」で一部しか出荷できない
鹿児島県	出水真鶴会（里芋〈赤芽大吉〉他）	雨ばかりで畑に機械を入れられないため雑草が大木のようになり、手のつけようがない。出荷できない
福岡県 佐賀県	豆腐などの原料大豆 各地農協	作付面積は前年並み。福岡で約8%、佐賀で約2%程度蒔き直しとなっている。蒔き直しの畑は1～2割の収量減の予想。秋の台風による被害を懸念

菊池地域農協（熊本県）

産直びん牛乳の原乳産地である菊池地域では、飼料価格の高騰を受け、少しでも経費を削減するため、また遺伝子組換えやポストハーベストの心配のないトウモロコシなどのエサを自給自足で確保しようと昨年より作付け量を増やしていた。この長雨で飼料用トウモロコシの収穫ができず、長雨が終わった後、ずっと収穫に追われている。通常であれば二期作目の作付けも終わっているはずが、2週間も遅れている。そのためトウモロコシの葉や茎が上の方から枯れてしまい、エサの出来が悪くなる心配も出てきている。それでも生産者は、産直びん牛乳の原乳生産のために頑張っている。

▲ 飼料用トウモロコシの収穫が遅れています

かきのきむら（島根県）

△ 斑点病が心配されるピーマン

ハウスでは日照不足と長雨の影響で、水菜や小松菜が根腐れをおこし生育不良となった。さらに収穫を迎えた頃の長雨で根元の水が溜まったままになり葉が変色し出荷できる状態ではなかった。ピーマンはハウス、露地共に日照不足で生育が悪く、株全体が弱く葉に斑点病が出始めている。少しずつ収穫はできているが不安な状態が続いている。

九重高原微生物農法研究会（九微研）（大分県）

▲ 着花していないトマトの茎

トマトの生育には太陽の日差しはとても大切。しかし、花が付く時期に十分な日差しがなかったため、花が着いても勢いがなく、また、光合成も十分行われておらず実がついていない。9月中旬にはトマトを出荷することができない可能性がある。植物には栽培に必要な自然の条件がある。その一つを断たれると成長しない。自然の摂理だが、今回のような自然災害は厳しい。

糸島BM農法研究会（福岡県）

糸島地方は地下水が多くて水位が高いところに、7月の集中豪雨で周囲の水路が溢れてハウスに雨水が大量に流れ込んでしまった。

ミニトマトが大量の水を吸ってしまうことによって、トマトの実が割れしてしまった。ハウス内のすべてのミニトマトが水害によって出荷数ゼロになってしまった。

▲ 水害に遭ったハウス内のミニトマトと実が割れたミニトマト

多久愛菜会（福岡県）

水路に隣接し、1mくらい下の位置に4棟並んであったハウスに雨水がどっぷりと浸かった状態になってしまった。ハウスを襲った集中豪雨は水位1メートルもあり、村上さんはどうすることもできずにきゅうりが雨水に飲み込まれるのを見守るしかなかったということだ。多久愛菜会は、例年7月の出荷量の3割程度の収穫しかできなかった。

▲ 集中豪雨で水害に遭った村上会長のきゅうりのハウス